

2010 3月21日~27日

第106号

©日本経済新聞社 2010

2010年 3月21日発行(毎週日曜日発行)

平成21年10月13日第三種郵便物承認

日経ヴェリタス

THE NIKKEI VERITAS <http://veritas.nikkei.co.jp/>

What's up

クイズを一つ。

「世界に膨大な量がある」一方、「そのうちすぐ利用可能なのは、わずか 0.001%」で、「過去50年の世界消費量が4倍に増え」、「2050年には世界10億人がその不足に苦しむ」——こんな「資源」は、ナニ？

答えは「水」。別名「青い金塊（ブルーゴールド）」とも「21世紀の石油」とも呼ばれる「希少、資源」だ。

上下水道整備や淡水化など、2025年には 100兆円に迫ろうという成長市場。その争奪戦については3月14日号の特集をはじめ、日経ヴェリタスでも度々報じてきた。実は水面下でもう1つの争奪戦が進行中だ。

日本海に面する富山県。建って間もない最新鋭のミネラルウォーター工場が、経営が行き詰まり競売にかけられた。落札したのは中国資本。わざわざ高いコストをかけて運んでも「日本産の高級水」に喜んで大枚をはたく富裕層が中国には多数いるのだ、と関係者は言う。

「青い金塊」巡り世界で争奪戦、水資源の安全保障を考える

工場だけではない。山林もターゲットらしい。水問題への提言をまとめた東京財団によると、山間部での土地取引は過去10年で倍増。実態は分かりにくいだが、その買い主体は中国をはじめとする外資ではないか、という。

なぜ山林なのか？ 「まずは木材の伐採。そして真の狙いは、その下を流れる水」（水問題に詳しいグローバルウォーター・ジャパンの吉村和就氏）との見方がある。日本の山林には農地と異なり、外資の所有を制限する法はなく、土地の所有者が自動的に水源の権利を得るのだという。

3月22日は「国連世界水の日」。水の安全保障なくして、経済成長なし。この機会にすべての経済活動の土台となる「水問題」を考えてみてはどうかだろう。 (山本由里)